

ニュータウンの親水空間に関する調査研究

Study on Amenity Waterfront of Newtown

西村 直* 田中 尚人** 川崎 雅史***

by Sunao NISHIMURA, Naoto TANAKA, Masashi KAWASAKI

1. 研究の背景と目的

古来から水辺は生活の中心に位置し、集落形態もその水辺を中心に形成されてきた。洗濯など生活を支えるものとして、地域住民のコミュニティーの場として、さらに川魚を相手にした産業の場として、水辺は町の骨格をなし人間の生活と水は密接な関係を持っていた。

現代の日本の都市においては、人々の生活に必要とされる基本的な機能の大部分は高度に発達した技術によってまかなわれているが、その中でどのような水辺が生活の場で意味を持つものとなるのであろうか。

本研究では、現代生活における人と水との関係を再確認し、ニュータウンをはじめとする人為的な空間の親水計画を考える際の基礎資料として、千里ニュータウン（1961年）以降の近畿圏の代表的なニュータウンを対象として、その親水空間の変遷を把握し、居住空間と親水空間との基本的な空間構成に関する評価記述を行うことを目的とした。

2. 親水空間の定義

本研究で言及する親水空間は、ニュータウンにおける水辺の中で、レクリエーションや景観整備を目的に作られた、修景河川・ため池・人工水路網・公園内修景施設の4つの形態で存在するものである。

3. 調査対象

対象とするニュータウンは、近畿圏における1960年代以降の代表的な建設母体である、住宅・都市整備公団、京都市住宅供給公社、大阪府企業局、大阪府住宅供給公社の4つの公社・公団によって建設されたニュータウンの中から、水辺の創造に特徴のある対象を14ヶ所選出しその中から38ヶ所の親水空間について現地調査及びパンフレット・事業図面等の資料収集を行った。表-1に対象としたニュータウンの一覧を示す。

表-1 対象ニュータウンの一覧

	住宅地名	所在地	事業主体	事業期間(年度)
1	千里ニュータウン	大阪府千里丘陵	大阪府企業局	昭和36～昭和43
2	泉北ニュータウン	大阪府泉北丘陵	#	昭和39～昭和45
3	洛西ニュータウン	京都市西京区	京都市	昭和44～昭和56
4	向島ニュータウン	京都市伏見区	京都市住宅供給公社	昭和45～昭和55
5	平城	奈良県奈良市	住宅・都市整備公団	昭和45～昭和61
6	ウツティタウン	兵庫県三田市	#	昭和48～平成11
7	相楽	京都府木津町・精華町	#	昭和52～平成5
8	創造の丘・ナシオン	兵庫県西宮市	#	昭和53～平成12
9	レークピア大津	滋賀県大津市	#	昭和55～平成8
10	パークヒルズ田原	大阪府田原市	#	昭和58～平成10
11	久我の杜団地	京都市伏見区	京都市住宅供給公社	昭和59～平成2
12	阿武山台団地	大阪府高槻市	#	昭和60～平成10
13	光台	京都府精華町	住宅・都市整備公団	昭和60～平成10
14	コモシティ-皇田	大阪府交野市	大阪府住宅供給公社	平成1～平成5

4. ニュータウンにおける親水空間の変遷

はじめに、各事業体より収集したパンフレット・事業資料を整理し、対象とする親水空間を〈修景河川・ため池・人工水路網・公園内修景施設〉の4つの形態に分類し、施行期間ごとにプロットすると表-2が得られた。この図から、時代的に現れる親水空間の特徴を以下の3期にまとめて、記すことができる。

第一期：昭和35年～昭和47（1960～1972）

第二期：昭和48年～昭和60年（1973～1985）

第三期：昭和61年～現在に至る（1986～）

(1) 第一期 「ため池の保存」

1961年の千里ニュータウンに始まる大規模ニュータウンにおける親水空間の導入は、その多くが池を公園として整備することから始まった。ため池などの既存の自然環境を「風致地区」に指定し、その周辺の緑を含めた「風致の良好な」自然空間として保存する形が公園に取り入れられた時期である。

しかし、“親水”の概念が登場していないこの時期においては、安全性を考慮して意図的に水に触れさせる場は設けられなかった。研究対象の既存のため池は人との直接的な接触を持つものと言うよりはむしろ、ニュータウンのイメージ・景観を高める要素として創出・保全されたことが明らかとなった（写真-1）。

Keywords: 親水計画、景観、空間整備・設計

* 学生員 京都大学大学院工学研究科 環境地球工学専攻

** 学生員 工修 京都大学大学院工学研究科 同専攻

*** 正会員 工博 京都大学助教授 大学院工学研究科 同専攻

(〒606-01 京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-5122)

表2 ニュータウンにおける親水空間の変遷

	ため池	修景河川	公園内修景施設	人工水路網	昭和35年
千原南公園					第一期 ため池の保存
菅池公園					
千原北公園					
星の水池公園					
旗山公園					
大塚公園					第二期 親水の模索
中層住宅地内のせせらぎ					
原山公園					
新林池公園					
向島中央公園					
小畑川					
平城第四公園					
新橋尾公園					
大塚ヶ池公園					
泉北四号緑地					
すずかけ台公園					第三期 親水の多様化
ワッディタウン中央公園					
山松川					
はじかみ池公園					
淡谷川					
波公園					
久我の社・幼洗遊園					
久我の社・せせらぎ水路					
久保池					
御島戸川緑道					
平谷川					
水と緑のプロムナード					
ナシオン広場					
星田・A2ゾーン					
街区公園(田原)					
塩瀬中央公園					
リニアパーク北公園					
上の池公園					
駒ヶ谷公園					
北谷公園					
下水道公園					
橋野大通りの水量施設					
星田・B2ゾーン					

□ : 水に触れられるようにデザインされていない親水空間
 ■ : 水に触れられるようにデザインされている親水空間

(2) 第二期 「“親水”の模索」

1970年代に入ると“親水”の概念が「水辺に人を近づける」という形で表現され始めるようになり、水辺に対して積極的な整備が行われるようになった。そのような例として、水に触れられる場を設けた集合住宅地の棟間の人工的な水路や公園内に取り入れられた修景施設があった(写真-2)。しかし、このような空間は僅かであり依然としてため池を活用することが一般的であった。

この時代は“親水”という考え方が具体的な形となって現れ始めた時期であり、まだその表現の方法は確立していないものの、住宅地内の水辺を考える上で次の時代へとつながる試行錯誤の時代であったと言える。

(3) 第三期 「親水空間の多様化」

1980年後半になるとため池を活用することは減り、次のような多種多様な親水空間が作られるようになった。

a. 水に触れられることを目的とした空間の増加

親水空間をニュータウンに設けることが一般的になり、直接水に触れられる場が多く設けられている。水に触れる場合は、特に人工池や小さな流れなど修景施設として公園内に多く作られている。

b. 生活空間に浸透する親水空間

まちづくりが展開されるなか、親水空間もニュータウンを構成する一要素として一体的に整備されるようになっていく。その特徴的な例として人工水路網を有するまちが登場したことが挙げられる。住宅の脇に人工的な水路網を創り出すことで住居に近接した空間に水が流れ、日常生活の中で水と触れあうことができる(写真-3)。

c. 環境共生型親水空間

また環境に対する意識が高まる中、水辺環境にも「生態系」に注目する動きも現れ始めた。最も特徴的な事例は、“ビオトープ”の概念がニュータウンの水辺にも導入されるようになり、親水空間は地域一帯の自然のネットワーク形成の一環として取り入れられるようになりつつあることである(例:阿武山台団地)。

以上のように、ニュータウンにおける親水空間は池をまちの景観を形成する要素として整備したことから始まり、親水の概念の発生を経て、デザインの多様化もしくは混沌という現在に至る変遷が明らかになった。

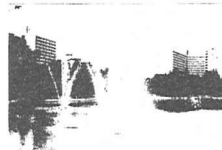


写真-1
第一期 景観を構成するた池
(千里ニュータウン)



写真-2
第二期 親水を意識した空間の登場
(平城ニュータウン)



写真-3
第三期 家の脇を流れる水路網
(コモンシティー星田)

5. 親水空間のデザイン考察

現代のニュータウンにおいて親水空間がどのように位置づけられているかを明らかにするため、ニュータウンの構成が以下の3つの枠組みから成るものとして考察をはじめ(図-1参照)。①で表される空間構成要素は、川や池、噴水など、存在する水そのものである。②の要素は①の要素に特別な意味を付加する空間であり、ニュータウンに暮らす人々にとって共有空間(非居住区)であり、水を眺める視点場や水に触れる場をつくり出す。③は、①②の周辺に広がる人の生活する空間、すなわち居住区であり、ニュータウンの根

幹なすものである。④はニュータウンを取り囲む周辺環境である。この空間構成の考え方をもとに、以下それぞれの事例について評価記述を示す。

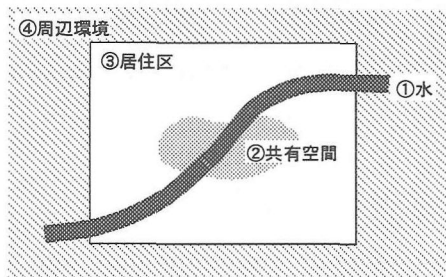


図-1 ニュータウンの空間構成要素

(1) 公園の親水水路

ニュータウンの公園内に人工的な浅い水路と広場をつくり、幼児も安心して水に触れて遊べる親水水路をつくる事例があった。平城・相楽ニュータウンでは、再処理されたきれいな水を緩やかな断面をもつ小水路に流し、水に触れることを促している。居住空間との接点は、この公園の中においてのみ見出されるが、水に直接触れることを可能にする空間である(写真-4参照)。

(2) 景観に開く・閉じる親水広場

初期のニュータウンの親水広場は水路や噴水などをつくり、周囲にベンチをおいて、これだけを中心的に見せようとする事例が多かった。これは、周辺の景観への意識が乏しくスケールの大きな魅力を失うことになると考えられる。創造の丘・ナシオンの中央公園の整備は、景観に対して開く・閉じるの両面が観察でき

た親水広場であった(写真-5)。テラスゾーンは、滝へ続く水路が周囲の山並みの風景へ視線を誘うように意図され、テラスと自然の風景が重なったが、ナシオン広場には複雑な造形を持つ人工的で無機質な空間が観察できた(写真-6)。

(3) シンボライズされた街路を演出する水路

ニュータウン内の骨格を形成する中心的な道路に併設して、街路の軸空間を強調したり、無機的になりがちな大通りに景観的な表情を与えようとする意図を評価できる事例がある。例えば、パークヒルズ田原の歩道にある水路は、それ自身の装飾性が高く、ベンチ、橋を設置したり、素材も石材を使い、歩道の舗装と差異化させている。また、軸方向に階段状に水を流して変化を与えたり、ゾーンによってデザインにテーマを与えるなどニュータウンの主役としてシンボライズさせようとする意図が読みとれる(写真-7・図-2)。

(4) 自然な川にある親水広場

ニュータウンに現存する河川を一部階段護岸を設置したり河原を整備して親水広場として整備する考え方がある。そこでは、河川本来の姿を変えずに、整備部分だけが特化しないように居住空間や周辺地形とのスムーズすりつけや汀線を大切にしながら、河川の風景に違和感を与えない方向性が重要であると思われる。そのような視点から観察すると、北摂三田ウッディタウンは平谷川と周辺緑地を一体的に整備することを目的としている事例であるといえる(写真-8・図-3)。階段護岸など自然の河川風景とは異なる印象を与え、表現が人工的に強調される部分もあるが、緩傾斜の広い河原などを作り周囲との連続性をもたせようとしている。



写真-4 平城・相楽N.T
昆虫と緑をはぐくむ下水道

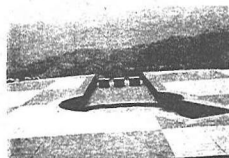


写真-5 創造の丘ナシオン
塩瀬中央公園



写真-6 創造の丘ナシオン
ナシオン広場



写真-7 パークヒルズ田原
いこまみち

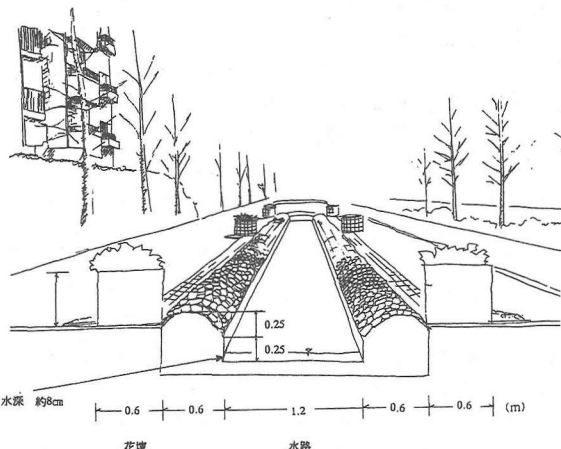


図-2 パークヒルズ田原・いこまみち(断面パース)

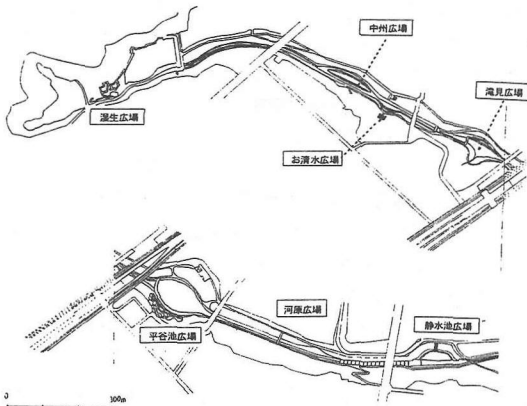


図-3 ウッドイタウン・平谷川（平面図）

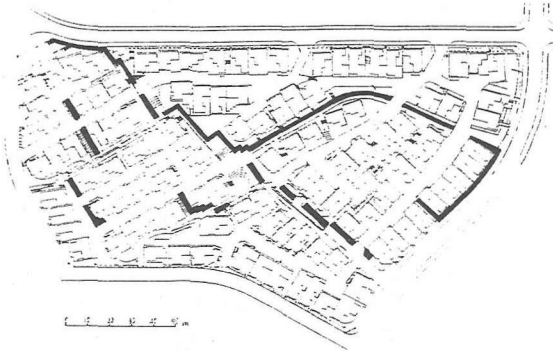


図-4 コモンシティ星田・A2ゾーン（平面図）

(5) 住宅と近接する水路網

住宅の密集する住居区内で水路が張り巡らされ、居住空間と道路が水辺と一体的に整備された意図が評価できる事例があった。例えば、コモンシティ星田、久我の社では、住宅と街路との境界に水路網が張り巡らされている（写真-9・図-4）。水路網の流れは住宅地区内部に浸透し、セミパブリックな空間を構成しながら併設する生活街路に沿って親水的な空間を作り出している。水路は住宅、街路と調和するように計画され、極めてシンプルなデザインで統一されている。さらに、この水路と隣接する住宅、街路の間には植栽ファニチュア等の境界物がなく、一体的な道の空間が形成される。特別水に触れたり、見せる演出があるわけではないため、一般的には親水空間としてみなされにくい、日常生活において水の存在を最も身近に感じられる空間として重要であると思われる。生活街路を歩きながら、そして、橋を渡ってそれぞれの住居へ入るとき、水の存在を静かに感じることができるのである。



写真-8 ウッドイタウン
平谷川



写真-9 コモンシティ星田
A2ゾーン

6. おわりに

本研究は、人と水、景観とのつながりを意識した親水計画を模索するために、ニュータウンを対象とした親水空間の調査研究を行った。4.では整備の时期的な概要を把握し、5.では親水空間のデザイン評価をデザインサーベイをもとに記述した。多様化の進む景観整備の中で、親水空間の求めるべき姿を判断することは極めて難しい問題であると考えられる。しかし、観察を続けていくと、優れた親水空間は人々の生活と有機的に関わり、そこには生活の知恵が生み出した装置や、隣接する景観と結びついた調和のとれた水辺の風景が存在していることが分かる。このことは、本研究の観察だけでなく、郡上郡八幡町や京都の上鴨社家町などの伝統的な水辺をも思い起こさせる（写真-10）。水と生活の有機的な関係をもって存在したこのような親水空間の詳細な解明を今後の研究テーマとしたい。

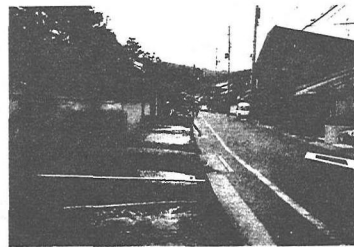


写真-10 上賀茂社家町

謝辞

今回、論文作成に当たって様々な資料を提供していただいた住宅・都市整備公団、京都市住宅供給公社、大阪府企業局、大阪府住宅供給公社の方々に深く御礼申し上げます。

参考文献

住宅・都市整備公団：『まちづくりの記録-日本住宅公団から住宅・都市整備公団に至る都市開発事業史』
高橋 裕：『都市と水』、岩波書店、1988.8